

# 園長先生の子育てひろば

令和6年3月

## 多様な「心」の理解

園長 山中 文

一昨年、本園には、名古屋大学大学院の先生方がご研究の調査でおいでになっていました。

その調査は、幼児の他者理解のご研究のひとつで、園や学校生活のきまりを逸脱して行動する子どもを見た子ども自身が、どのような感情や考えを持つかという調査でした。幼児期には、集団生活における規範意識を発達させていくことは重要ですが、きまりを守ることの大切さを強調すると、きまりを守らない子どもを否定的に見るようになる可能性があります。きまりを大切にしながらも多様な他者の思いを尊重して関わる力をどのように育てていくかという観点からのものでした。

その結果の一部が、ある冊子に論説として掲載されていました。それによれば、年少から年長までの園児の大半が「主人公は、みんなと同じように行動する方がよい」と考えていることが示されたということです。また年長児では、「部屋に戻らないと、先生や友達が困る」など、「きまりを逸脱する主人公の「心」ではなく、集団内の多数派（みんな）の「心」を意識して、価値判断を行う姿も見られ」（\*の17頁）たとの、ことでした。これらのことから、幼児期に他者理解には、目が向きやすい「心」と目が向けにくい「心」がある可能性があり、後者の「心」については大人が意識的に伝えていく必要性が示唆されたというように述べられていました。小学生の方の調査からは、さらに、自尊感情の高い児童はきまりを逸脱する他者の行動の背後の理由を考えたり、その他者と仲良くできる自信も持っていたりするという結果が得られたそうです。

論説では、大人は、大人の価値観が幼児の可能性に影響を与えることを考慮し、自分自身の多様性へのまなざしを省みる必要がある—と締めくくられていました。

この論説を拝見していて、だいぶん前に聞いた幼児の事例を思い出しました。歌を大きな声で歌いながら人形を乱暴にたたいている幼児に、「寝る時みたいにトントンしてあげているんだね」と言ったら、一瞬考えて、声もたたき方も赤ちゃんを寝かしつけるようにそっと優しくなったという事例です。先のように規範意識や他者理解点からの事例ではないのですが、ことばがけの一言で、この幼児は自分が寝る時にしてもらったこと、大人がどんな風にたたいたか歌ったか思い起こしたのかなと思います。幼児がそれまで向けていなかったことに自ら目を向けていくきっかけになったのではないのでしょうか。このように自ら目を向けていく一言を大事にしていきたいものだと思ったことでした。

\*この論説は、溝川藍「多様性の時代に生きる幼児の他者理解を育むために—発達心理学の視座から—」（『幼児教育じほう』2023年12月号、2023）であり、本文はそちらを引用・参考にしています。